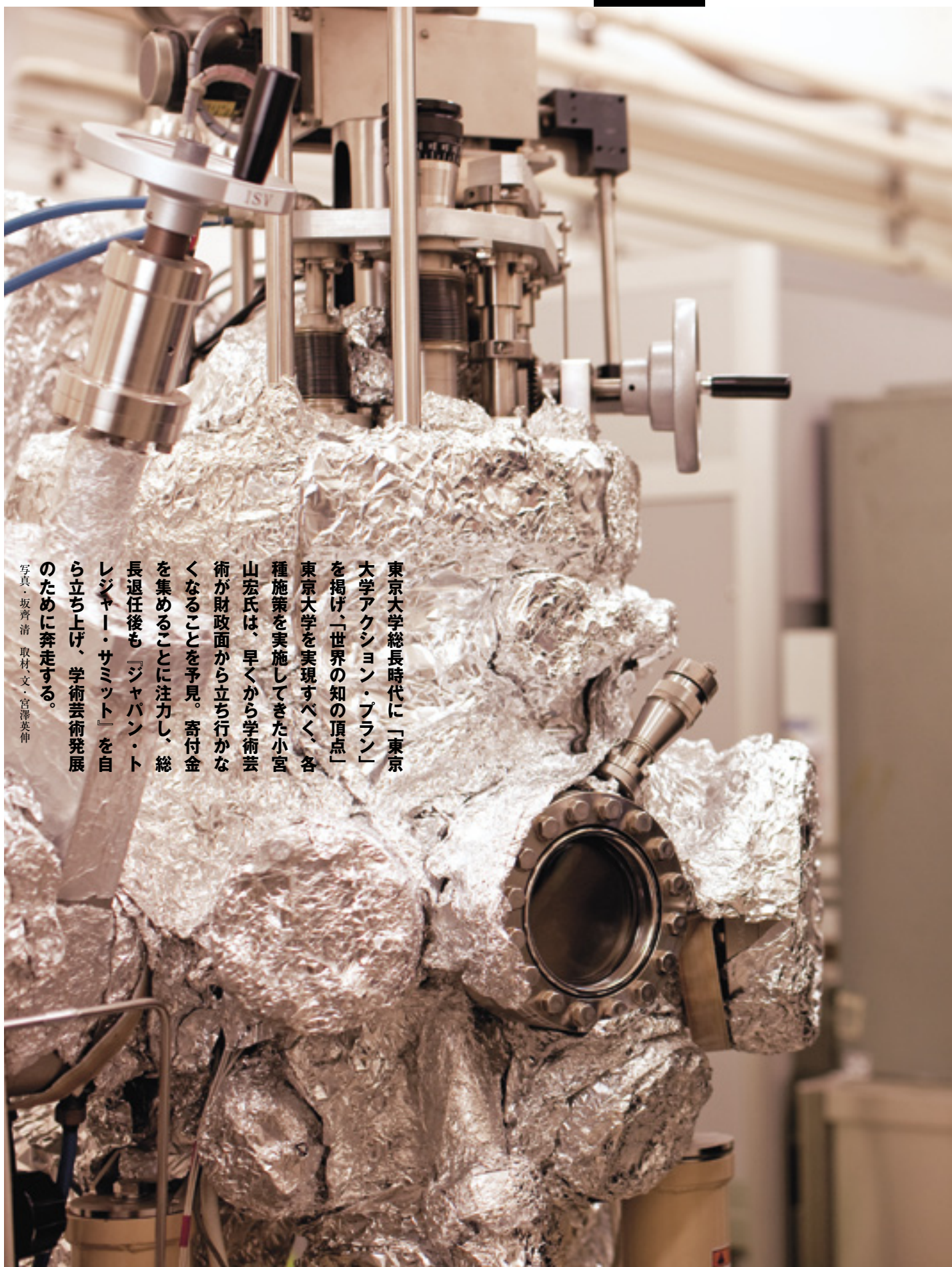


→ 小宮山 宏

こみやま ひろし／三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問。1944年栃木県生まれ。1967年東京大学工学部化学工学科卒業。1988年東京大学教授、2000年同大学大学院工学系研究科長・工学部長、2003年同大学副学長、2005年4月～2009年3月同大学総長を務める。著書に『課題先進国』日本（中央公論新社）、『知識の構造化』（オープンナレッジ）、『地球持続の技術』（岩波新書）などがある。専門は、知識の構造化、化学システム工学、地球環境工学。



かつての研究室で撮影が行なわれることを知り、先生や学生たちが自然と人垣を作る。今も「ミスター東大」として、多くの人に慕われている。



東京大学総長時代に「東京
大学アクション・プラン」
を掲げ、「世界の知の頂点」
を掲げ、東京大学を実現すべく、各
種施策を実施してきた小宮
山宏氏は、早くから学術芸
術が財政面から立ち行かな
くなることを予見。寄付金
を集めることに注力し、総
長退任後も『ジャパン・ト
レジャー・サミット』を自
ら立ち上げ、学術芸術発展
のために奔走する。

写真・坂齊清 取材、文・宮澤英伸

心豊かな暮らしは学術芸術が創造する。

ハーバード大学 などは 基金の運用益だけで 東京大学の総予算の 2倍に達する

←

昨年10月、小宮山さんの主導の「JTS」が設立されました。その目的について、お聞かせください。

学術芸術分野のトップリーダーが集い、その方々とともに学術芸術が果たす役割、その素晴らしさを、さまざまな形で皆さんに広くお伝えしていきたいと考えています。同時にそうした活動を通じて、日本社会に合った寄付文化、社会的投資文化の形を提案することで、学術芸術活動を社会全体が支える風土を醸成していくことを目指しています。そして最終的に、多種多様な人材が学術芸術分野の担い手となり、その活動の輪が今まで以上に広がっていく。このことによって、寄付金市場が飛躍的な拡大と発展を遂げ、寄付文化、社会的投資文化を支える各種制度が整ったとき、JTSもその役割を終えると考えています。

← 寄付文化、社会的投資文化を醸成していくことですが、そもそもそうした文化が必要だとされる理由は何ですか？

ご存じのとおり、私は2009年3月まで東京大学の総長を務めておりましたが、在任期間中、「東京大学アクション・プラン」と銘打ち、各種施策を掲げ、それを実行に移していきました。具体的には、人材、



日本はまだ寄付文化が未成熟。個人が寄付し易い環境に変革することが一番の目的です。

資産、インフラをいかに配分するか、基盤をいかに整備していくかということ、教育、研究、国際的活動、組織運営等、計7つの分野に区分して示し、実行へと移していったのですが、そのなかのひとつに「財務」がありました。

具体的には、資産運用・資産活用・起債などに関する規制緩和を要望し、組織規模を生かした調達効率

化、さらには東京大学基金のコアの確立など、東大の足元を支える財務基盤の強化と、戦略的で効率的な資産運用ができるようにすることを目指していきました。

それはなぜかといえば、2004年度に国立大学が法人化されたことで、国からの機関補助が年々削減されてきたこともあり、経営基盤の確立が急務だったからです。私が総長を務めていた当時、東京大学が国から受け取る運営費交付金は880億円でしたが、これは予算規模2200億円の4割程度です。もちろん、歳入の基幹であることに変わりはないのですが、交付金に依存したままでは新たな展望は開けず、どうしても資金調達の多元化が必要でした。この数字を聞くと皆さん驚かれるのですが、たとえばハーバード大学の基金残高は3兆5000億円、エール大学のそれは2兆1800億円あります。しかも平均して年10%以上の運用益をあげていますから、それだけで東京大学の総予算の倍に達することもあるのです。

戦略的かつスピーディにお金を投入するための財務基盤が必要であることは東京大学にかぎったことではなく、日本のすべての大学にいえることです。この部分を強化していか

ないかぎり、日本の大学は加速する国際競争から脱落してしまうといっても過言ではないのです。

アメリカの大学の 多額の寄付金の 背景には 寄付を集める 専任のスタッフの 存在がある

←

文化の違いと言ってしまえばそれまでなのでしょうが、どうして基金ひとつとっても、日米の大学でそれほどの差があるのでしょうか？

大学への寄付にかかわらず、寄付金全体の規模も国内総生産比で日本が0.1%なのに対し、アメリカは1.7%と大きな差があり、とくに個人の寄付において日本は低調です。しかしここには、文化の違いという言葉だけでは片づけられない、見逃せない理由も存在しています。

私は長く工学部の教授を務めていましたから、総長に就任する以前から、とくにMIT（マサチューセッツ工科大学）の人たちとの交流が深かったわけですが、当時の学長だっ

たチャック・ベストさんが私にしきりにこぼすのです。「MITはエンダウメントが少ないから、そこが弱みなんだ」と。エンダウメントとは寄付金・基金のことですが、当時のMITの基金残高は7000億円でした。10%としても運用益は700億円ですから、私にすればどこが足りないかと思うのですが、彼は前述のハーバード大学とくらべていたわ



けです。

そこで私は「どうやったら、そんなに寄付を集められるのか？」と聞きました。すると彼はこともなげに言うわけです。「それはもちろん、寄付集めを専任とするスタッフを雇うのさ。それも1000人規模でね」と。MITには現在、約1300人の寄付集めの専任スタッフがいます。ハーバード大学には約450人の、

そうした人たちがいます。

アメリカの大学の、日本から見れば桁違いの寄付金の背景には、こうした違いもあるというわけです。

Japan Treasure Summit Special Talk.

← 学術芸術活動が 社会に貢献する 努力と成果を 「見える化」する

——日本において学術芸術分野への寄付、とくに低調とされる個人の寄付を促すためには、具体的にどうしていったらいいとお考えですか？

ひとつには税制改革が重要となると考えています。国公立の大学団体は、所得税および相続税について、寄付者へのインセンティブを付与する制度創設を要望していますが、とりわけ私が着目するのは相続税です。日本の家計金融総資産は約1500兆円ともいわれ、先進国のなかで第2位の規模です。また死亡時保有資産の年間合計は75兆円とされ、その合計課税価格は2006年度の数字で10兆4000億円とされています。つまり多くの相続財産が捕捉されていないと推測され、社会的公正の視点からも問題といえます。

そこで私は、学術芸術への寄付について、その全額を相続税額から控除することが、寄付への強い誘因になると考えています。と同時に、これにより適正な申告が促されれば、国全体にとってもメリットは大きいのではないかと考えています。従来のように課税対象額からの控除ではなく、税額そのものから寄付額を控除するという大胆な手法が採り入れられるようになれば、個人を中心とした寄付文化、社会的投資文化を醸成していくことにつながると考えています。

もつとも、こうしたことの実現には、学術芸術活動が社会に貢献する努力と成果を「見える化」していかなければなりません。昨今の政府による事業仕分けについては、学術芸術分野も無関係ではいられず、予算削減の対象となりました。私は総長に就任する前から、日本の学術芸術というのはいずれ財政面から立ち行かなくなることを危惧していましたから、これを契機にもう一度、みんなで議論をしていくことはとても有意義だと思えます。

ただ、いづれにしても、お金が必要なのだと要求するだけではダメで、自らの活動がどのように日本の未来に貢献できるかを「見える化」して

いくことが極めて重要となります。JTSの存在意義もまさにここにありと考えており、学術芸術分野のトップリーダーたちが自ら先頭に立ち、学術芸術が果たす役割を世に問い、その素晴らしさを日本のみならず、世界に向けて発信していくことが、とても大切だと私は考えています。

——小宮山さんは東京大学の総長を務め、工学者でもあるわけですが、とくに学術分野において今後、期待することは何ですか？

これは拙著『課題先進国』日本』（中央公論新社）などで述べてきたことなのですが、日本は「課題先進国」だと私は考えています。どういうことかという点、少子高齢化社会の問題、エネルギーや環境の問題、医療の問題、食料の問題、都市の過密化と農村の過疎化の問題など、現在の日本が抱える数々の問題は、いづれ世界全体が直面する困難ということなのです。

それでは、なぜ日本は他国に先駆けて課題が顕在化しているのかといえ、天然資源に乏しく、狭い国土でありながら、世界第2位の経済活動を行なっているからにはかなりません。世界に先駆けて課題が顕在化するということは試練ですが、それは同時にチャンスでもあります。現在、

「プラチナシティ・ネットワーク構想」というものが注目されていますが、これは私が総長時代に種をまいた東京大学・柏キャンパスのフューチャーデザインセンター（FDC）の活動や、東京大学・高齢社会総合研究機構のジェロントロジー（高齢学）の研究成果がベースとなっています。エコハウスを中心として、エコでバリアフリーで快適な街づくりを日本全国で進めていこうという試みですが、すでに青森県や福井県などで実際にプロジェクトが進行しています。

太陽光発電などの自然エネルギーやスマートグリッド（次世代送電網）などによる低炭素エネルギーが供給され、市街地には医療機関や職場、商店や学校などがあります。そして街に住む人々には、医療や教育をはじめとする情報システムなどもパッケージ化して提供されます。さらに高齢者のレセプト（診療報酬明細書）のデータと、健康診断や介護のデータを一体化していくことなども検討されています。

このように、日本が自らの課題の解決に成功し、「課題解決先進国」として邁進できれば、世界が日本を見倣い、日本のシステムを導入することになるはずです。これは、これからの日本が果たすべき世界的な

役割でもあると思います。また、世界は日本に敬意を払うことになるでしょうから、課題解決に取り組むことは、日本の国際競争力を生む真の源泉でもあるわけです。

そしてこうした場合に、「課題解決先進国」実現に向けて学術が果たす役割は今後、ますます大きなものになっていくということについては、皆さんも異論はないのではないかと思います。

Japan Treasure Summit Special Talk

細分化された知識を 相互に 利用可能とする 「知識の構造化」が 求められている

「課題先進国」から「課題解決先進国」になるために、学術分野においてはどのような人材が求められるのでしょうか？

20世紀の学術の進歩は、現代社会に多くの知識をもたらしましたが、一方で知識の細分化を生み出しています。学会の数だけで900を超えているという事実ひとつとっても、そのことがわかります。結果として、専門を異にする人たちの相互理解が極

めて難しくなっています。

たとえば、ある人は熱力学に取り組み、別のある人はインド哲学を研究しているとします。そのテーマだけを聞くかぎり、お互いに相関関係を見出すことはできませんし、現に今まで顔を合わせたこともない。これが現状です。

ところが、よくよく話を聞いてみると、前者は熱力学を駆使してCO₂

とつながっていきます。

結局、今の学術は人が求める価値と研究との距離があまりに離れすぎてしまっているのです。しかも、それをつなぐ人がいません。複雑化している社会と、細分化した知識。この間のギャップをいかに埋めるかは、人類が直面する最も本質的課題だと言えます。

そこで私はその解として、細分化



学術や芸術を通じ
コミュニティを
生み出し、
心豊かに生きる
社会実現に寄与
したいと思います。

の削減につなげたいと考えている。そして後者はインド哲学を通じ、高齢化だけでも生き生きとしたコミュニティを作りたいたいと考えている。つまりお互いに今の日本が抱える課題解決に取り組んでいるわけで、もし両者が手を携えれば、自然環境に優れ、精神的にも豊かな社会を追求することが可能となります。そしてこれは、「課題解決先進国」の道へ

された分野に分散した膨大な知識を、相互に利用可能とする「知識の構造化」が大事だと考えています。そして今後は、それを実践できるような人が、求められると思っています。知識の体系のなかで、その研究がどういうポジションにあるのかということを位置づけ、全体像を作り、そこに分散された知識や研究を位置づけられるような人です。

ジャパン・トレジャー・サミット

って何？

小宮山宏氏が代表理事を務める一般社団法人として、2009年10月に設立。学界(理工学・生命科学・人文社会)や芸術界(美術・音楽・舞踊など)からトップリーダー「独創人」が集い、寄付文化、社会的投資文化醸成に取り組む。おもな活動内容は以下のとおり。

- 1 日本の学術芸術活動の素晴らしさやそれらの活動を牽引する各界の「独創人」の生き様、志、素顔をメディアを通じて発信。
- 2 次代を担う若者たちに本物の学術芸術を感じる機会を提供。海外から日本を訪れる人々や、世界中で活躍する日本人を介して、日本の学術芸術の魅力を世界に伝える。
- 3 多様な人々がそれぞれの立場で、学術芸術活動に関わり、支えていけるようなスタイルを提案し、次代につなぐ支援コミュニティを創造。
- 4 「独創人」が学術芸術活動に専念しながらも、社会とのつながりを深めることができる環境整備。
- 5 寄付金税制・相続税制、公益信託制度など、寄付金市場の成長の礎となる制度設計について提案。
- 6 寄付金募集や支援コミュニティ形成、学術芸術活動に関する情報発信などのためのシステムインフラを企画・提案。



小宮山宏氏とともに、JTSの理事を務める山本邦山氏(左)。尺八演奏家で重要無形文化財保持者(人間国宝)でもある。

ジャパントレジャー・サミットについてのお問合せは
 『ジャパントレジャー・サミット事務局』
 URL www.treasure-summit.jp

私はかねてより、研究者の価値というのは、どれくらい優れた全体像を持っているかによるところが大きいと考えています。それにもとづいて研究テーマを決め、掘り下げていく。知識が細分化されている現在だからこそ、今後は優れた全体像を持っている人がますます必要とされるのではないのでしょうか。

一部の人の多額の
 寄付だけでなく
 多くの人たちによる
 少額の寄付を
 広げたい

最後に、小宮山さんは日本の社会は今後、どのようにあつてほしいと考えていますか？

冒頭で、寄付文化、社会的投資文

化を支える各種制度が整ったとき、JTSもその役割を終えたと申しあげましたが、「制度ができたら即、おしまい」というわけにはいかないと思っています。制度ができ、それがだんだんと浸透し、最後はだれもが心豊かに生きるというところまでつながってはじめて、その任を終えることができると思っています。

これは私がつねづね思うことなのですが、人間というのは結局、人との関わり合いなくしては生きていきません。しかし現代はあまりにその関係が希薄すぎるように思います。私などは子どもの頃によく、親から「人に迷惑をかけてはいけません」と言われながら育ちました。おそらく皆さんも、そうだと思います。けれども実際には、人に迷惑をかけるに生きていくことなど不可能です。だから私は「迷惑をかけ合うのが社会だ」くらいに思っておいたほうが、

今の時代にはちょうどいいのではないかと思っています。

私はケヤキという木が好きで、自宅の庭にも植えてあるのですが、落ち葉の季節になると近所の方々に迷惑をかけてばかり(笑)。そこでその季節になると、毎朝早起きをしては道路に落ちた葉を掃除するのですが、近所の方々は私より早起きの人も多くて、あらかじめの掃除が終わっていたりすることもあります(笑)。そうなる所こちらも恐縮しきりとなるわけですが、それでも落ち葉をきつかけにして会話が弾み、一日を気持ちよく始められる日々が続いたりします。

落ち葉ですらそうなのですから、ましてこれが学術や芸術だったら、もっと楽しいじゃありませんか。寄付という行為を通じて、学術や芸術に対してみんなで余計なお世話を焼くのです。焼かれるほうとしても、

その心遣いはきつとうれしいはずですから、一生懸命にその活動に取り組むはず。そしてその成果は、やがて社会へと還元されていきます。こうした良好な関係は、一部の人以上の多額の寄付よりも、多くの人たちによる少額の寄付からのほうが育まれやすいと私は考えています。

寄付というのは金額の多寡ではありません。むしろ金額そのものよりも、そうした行為をきっかけにして多くの人が学術や芸術に今まで以上に興味を持つようになったとき、私たちの生活はもっと心豊かになると思います。

文明の発展にともない、コミュニティが自然に発生することがなくなりました。だからこそ学術や芸術を通じてそうした場が設けられていたら素敵なことだと思えますし、JTSがその一助になればと、私はそう考えています。